

リーフノベルとは…原稿用紙4枚分、つまり1600字以内に収める  
超短編小説で、新しいジャンルです。あなたも挑戦してみませんか。

## ときめきリーフノベル 喜劇

文・高安義郎 絵・芝章一



一人息子が大学生になり家を離れる  
と松子は急に手持ちぶさたになった。

そんな折、松子の女子高時代の仲間の  
キー子が尋ねてきた。キー子は学生時  
代演劇部に所属していたが、現在その  
時の仲間を中心にして作った小さな劇  
団の一員だった。キー子は松子に劇団  
に入るよう勧めに来たのだ。松子も少  
しばかり演劇部にいた経験もあり、す  
ぐに入団したのである。

松子の夫は町役場に勤めるまじめで  
優しい男だった。松子が劇団に入団し  
練習で夜遅く帰宅しても文句一つ言わ  
ず、「今度見に行くよ」と応援さえし  
てくれた。

劇団は丁度過渡期にあった。これま  
で公演してきた出し物は観客が見飽き  
ているようで、劇団存続の為に何か  
新しい物に挑戦すべきだという機運が  
高まっていた。丁度そんな時期にリー  
ダーが体調を崩して入院し、キー子が

座長を仰せつかったのだった。

「新しい劇のアイデアはみんなに任  
せるとリーダーは言っていたわ」キー子  
の呼びかけに、数日して出された案は  
喜劇に挑戦しようということだった。

「喜劇の台本、何にしようか。既成の  
シナリオじゃつまんないし。良い物も  
ないしさ」

「吉本の真似したってしょうがないし  
ねえ」

「そうよ、どたばたは芸術じゃないも  
の」

「いや演劇は娯楽よ。芸術なんて思  
わなけりゃいい」

「そりゃ違う。演劇こそ総合芸術よ」  
侃々諤々かんかんがくの議論を戦わせ、気がつく

夜中の十二時を過ぎていた。

「松子、旦那さんに電話するの忘れて  
るでしょ。怒られるぞ」

キー子が言った。

「大丈夫。家の人、私には優しいの

よ」

「優しいってのはあやしいんだよ。他  
に女が居るから女房に優しくすることも  
あるし」キー子の冗談を松子は一笑に  
付した。

それから数日後のことだった。

「ねえ、自分の旦那が浮気をするかし  
ないかの賭けをする話はどう？賭けを  
した友達は賭けに勝つために夫を誘惑  
するのよ。誘惑に負けそうになる夫に  
ハラハラしながら、最後に妻の所に  
帰ってきてハッピーエンドってのは」

「あら、私の家がモデルみたいね。良  
かったら私とその妻の役をやりたいわ  
でも焼き餅を焼く女の気持ち、分か  
ないな」

「じゃあ松子は賛成ね。他のみんなは  
どう？」その日集まっていた者はみな  
賛成し、早速キー子がシナリオを書く  
ことになった。

「この劇は台詞で笑わせるんじゃない  
て、男と女の怪しい動作をコミカルに  
演じることで楽しませるのよ。だから  
台詞は普通の劇より少ないけど同じ時  
間を掛けるの。演技力が要求されるわ  
よ」

キー子はいつの間にか監督役をかって  
出していた。台本書きが始まって間もな  
く、キー子は松子の家に足繁く尋ねて  
くるようになった。

「まじめな旦那のイメージが掴めない  
の。松子のご主人ちょっと参考にさせ  
てね」

茶を飲みながら松子の夫にちらちらと  
視線を向けた。

それから一月が過ぎた。台本も完成

し読み合わせが始まると松子は言った。

「私、やっぱり焼き餅なんか焼いたこ  
とないから難しいなあ」

「なに言っているのよ今更」

「だって家の人、私一筋だから。幸せ  
な人間には不幸は演じられないのよ」  
松子はそんなのろけたようなことを  
言った。

そんなある日曜日のことだった。松  
子が買い物に出ている間にキー子が尋  
ねて来ると、一人で庭に居た松子の夫  
に何やら耳打ちをした。

やがて松子が帰ってくると、キー子  
はいきなり夫の胸にすがりついた。そ  
れを見た松子は、

「何やってんのよキー子。あなたもど  
ういうつもりなのよ」買い物袋を放り  
投げ大声を出した。

「分かったでしょ、焼き餅の気持ち。

今ご主人に頼んで演技して貰ったの」

「嘘でしょ。本当なのあなた」

「そう。今頼まれて」

「嘘だわ。悪いけどキー子帰ってよ」  
松子の剣幕にキー子は取り付く島もな  
く帰って行った。

松子はそれっきり劇団に顔を出すこ  
とはなくなった。数日して夫は言った。

「この間のあれ、本当に頼まれたんだ。  
離婚なんて考えてないよな」すると松  
子は、

「あたりまえよ。これで離婚したら本  
当の喜劇じゃないの」

目をつり上げながら言った。